

図9：ゴール。ヘトヘト。

ゴールを迎えてしまいました(図9)。さすがにヘトヘト。ゴールすると、完走記念メダル、水とベール、リンゴのはいった袋、そして防寒用のマント(ビニール)を渡され、そのまま止まらず歩くよう指示されます。その通路に撮影コーナーが設置されていて完走記念写真をパシャ(P.25写真)。写真はどこで受け取るのか聞くとインターネットでゼッケン番号を検索しろ、と。ちなみにタイムや順位も靴につけた電子チップで自動的にカウントされていて、これもインターネットで。日本に帰って検索するとタイムと順位と記念写真のみならず、レース中の自分の写真が20枚くらい上がってきました。群衆の中のゼッケンを判読しているのです。迷わず100ドルでオンライン購入。インターネット(とそのビジネス)恐るべし。記念撮影後は、荷物をpick upして流れ解散。着替えてジャージ姿で地下鉄にのってホテルに帰りました。この日はマラソン出場者と見えれば地下鉄はタダと決まっています、通りすがりの人々にいちいちcongratulations!といわれます。完走おめでとうという意味で。アメリカっぽいな。

さて、このマラソン、いったいなんだったのか。ひとついえるのは、ちょっと手間と時間のかかる、物語型旅行の一種でありました。通り一遍の観光では味わえないNYCを体験できた。走りながら見る町並みというのはなんともいえない印象を脳裏に焼き付けます。これもモノアミンの効能か。2つめは、人間が「がんばる」メカニズムがよく見えた。というよりモデルとして体験できた。それはつまり、すこし高いところに目標があって、それをクリアした時、快感が生まれる。このサイクルがうまく回れば、びっくりするくらい高いところまで行ってしまおう。「挫折」はこのサイクルの破綻。それから精神活動は肉体的コンディションに非常に影響をうけること。走っていて、どこまでもいけそうな感じがしたり、突然いいアイデアが浮かんだり。そういう時は必ずゆるい下り坂なのです。一方、もうやめようと思うのはいつもゆるい上り坂。はじめは傾斜があること自体に気がつきませんでした。とまあ、いろいろなことを考えながら、大変よい思い出ができました。よかったです。次また出場するか。ううん、今はまだ次の大会のことは考えられません。なんて、オリンピック選手みたいなこと言うんじゃないやねえよ！ (おぞの りょうじ)

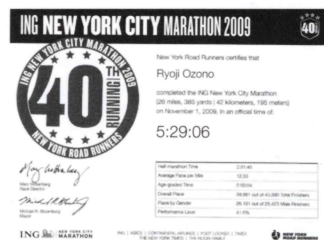


図10：完走証明書
後に郵送されてきたタイムと順位。
43590人中38881番。